

令和3年度 学力向上プラン

学校名 中央区立 久松小学校

学校の教育目標

「強く」 「正しく」 「豊かに」

教育目標を達成するために学校として重点的に育成を目指す資質・能力（確かな学力向上にかかわる内容）

- ・強い意志をもち、向上心に満ちた「自己実現力」
- ・ものごとを正しく判断し、主体的に思考を深め創造する「問題発見・解決能力」
- ・互いに尊重し、思いやる「人間関係形成能力」

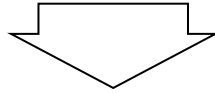
令和2・3年度「学習力サポートテスト」や令和2年度学力向上プランの検証結果等の分析や、日常の学習の様子等から見られる課題及び要因

	児童・生徒の学力の課題	主な要因
国語	様々な図書に親しみ、読書する習慣を身に付けさせる。物語や文学作品を好む児童が多い。人物の心情や様子を作品の叙述にそって読み取ることができる。教科等で書く活動の場面が増え、書くことへの抵抗感が少なくなっている。表やグラフなどの資料を使って自分の考えを効果的に伝えるような文章を書く力が育ってきた。自分の思いを順序に気を付けて話したり、目的や意図を明らかにして分かりやすく書いたりすることには課題がある。低学年では、促音・拗音・助詞の使い方に課題のある児童がいる。	図書室の利用回数及び朝読書時間を削減したことが要因であると考えられる。人前で話すなどのスピーチ経験が不足している。また思いが強く頭に浮かんだままを伝える児童が多い。主語と述語の関係・接続語や文末表現の使い方に気を付けて、話の構成や文章の構成を考えるなど、発段階に応じて知識・技能を着実に習得させる必要がある。
算数	数学的活動やICT機器の活用を通して、基礎的な知識・技能が習得できている。これらの資質・能力を生かして、課題解決するための活用能力を高めることが課題である。特に、グラフを活用して自分の考えの根拠となる情報を読み取り説明する力（思考力・表現力）に課題がある。	日常生活経験につながる数学的活動がやや不足している。児童は、身に付けた知識・技能をどう関連付けて活用すれば課題解決できるかという見通しをもちにくい状況にある。児童一人一人の学習力の状況に応じた問題解決型の学習の充実、学びを深めるための小集団活動の質の向上、ICT機器を活用したドリルパークの利用によって改善する。
社会	自分が住む地域の様子や歴史的事象に対する関心が高い。地域社会のために働く人々、生産者として働く人々の仕事の工夫や努力について理解している。また社会的な事象についての具体的な資料を読み取ることができる。課題に対して調べたこと、分かったことを生かしながら自分の考えを整理し、表現することに課題がある。自分が調べたいことと活用する資料の内容が合致しているかどうかを判断する力を育てる。	資料の中から自分の課題解決に必要な情報を読み取り選択するための知識・技能が不十分な児童があり、個人差も大きいことが要因である。目的に応じて得た資料を比較・分類・関連付けながら結果や原因を分析する方法（学び方）などを、ある事例をもとに学習したり他教科の学習場面で経験したりすることで、資料活用能力を高める。
理科	理科に対する興味・関心が下がっている学年がある。自分が立てた予想と関連付けてノートに結果を整理し、考察する力が育ってきている（個人差はある）。	実験や観察を要する学習やグループ学習に支障が出たことが大きな要因である。また、結果を比較・分類したり、違いについて推測したりする学習場面が十分に設定でき

	<p>実験を通して得た結果から新たな課題を発見したり、さらに主体的に学習を深めようとしたりする力を高めることが課題である。実験・観察に使用する器具の正しい扱い方やそうした器具を活用することで明らかになることの知識など、基本的な活用方法に対する理解が不十分である。</p>	<p>ていないことも要因と考えられる。実験の目的や方法と結果を関連付けながら自分の考えとしてまとめる段階での個別の支援が必要である。</p>
英 語	<p>歌やチャンツ、簡単なペアワークを通して外国語に慣れ親しんだり、興味・関心をもって言葉の背景にある文化や習慣を理解したりと、意欲的に学習に取り組んでいる。対話の具体的な情報を聞き取り、その内容を理解する力が高まった。学習したことを生かし、自己表現する力や積極的に課題を解決していくなど、主体的に学習に取り組む態度を育てていきたい。</p>	<p>発話や発声を行い活動やペアやグループでのアクティビティが制限され、十分な言語活動を行うことができなかった。そのため、自信をもって発話しようとする児童が少ない。より身近な場面設定をして言語活動を行ったり、高学年では毎時間ペアでの small talk を継続して行ったりするなどして、学習したことをアウトプットする機会を増やしていく。</p>
体 育	<p>体育への興味・関心が高く、体を動かすことが好きである。縄跳び運動に意欲的に取り組んでいる。全体的に児童の体力・運動能力が前年度から低下の傾向にある。筋力や巧緻性・柔軟性、また固定用具等を使った運動遊びの能力についても個人差が大きい。体力調査については走る動きは区の標準値に近く安定しているが、ソフトボール投げや20M シャトルラン、握力などの種目については課題が見られた。</p>	<p>水泳学習が実施できなかったことをはじめ、新型コロナウイルス感染症対策のために体育学習や様々な運動の機会に制限があったことが体力低下の要因である。体育の授業でしか体を動かす機会のない児童が増加していること、急激な児童数増加に伴う外遊びの量や質に制限が生じていることも要因と考える。基礎的な体力の向上をねらった取組を意図的・継続的に導入し運動経験を増やす場所を確保することが必要である。</p>

学力向上に向けた視点	年度末までの目標及び指標
①学力基盤	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の授業規律や基礎的・基本的な学習内容の確実な定着を図る。 ・児童が自ら課題をもち、主体的に学ぶ態度を育てる。 ・児童アンケートで「勉強が好き」な児童8割以上を目指す。 ・児童アンケートで「正しい姿勢で学習する」児童8割以上を目指す。 ・保護者アンケートで「児童の基礎学力定着の状況」に対して概ね満足と回答する保護者9割以上を目指す。
②授業改善	<ul style="list-style-type: none"> ・授業改善を通して、児童の思考力・判断力・創造力・表現力をバランスよく育成する。 ・児童アンケートで「学習が分かる」児童9割以上を目指す。 ・保護者アンケートで「分かりやすく楽しい授業を実践している」ことに概ね満足と回答する保護者9割以上を目指す。
③教員の指導力	<ul style="list-style-type: none"> ・教員一人一人が個々の課題を明らかにして、授業力向上のためのプランを立て、実践・検証する。 ・カリキュラム・マネジメントの充実を図るとともに、校内のOJTを推進し教員の指導力を効果的に高める。 ・授業力向上のための授業実践報告会を実施し、個々の教員の課題解決に向けた協議会を教員全員で行う。
④家庭との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・地域や家庭との連携を深め、児童の学力向上に向けた教育活動に理解と協力を求め、より高い学習成果を目指す。 ・新しい評価の在り方について、引き続き説明する。 ・家庭学習を毎日、ほぼ毎日する児童9割以上を目指す。

⑤体力向上	<ul style="list-style-type: none"> ・体力調査で児童が個々の記録を上回ることができるよう、一人一人の体力向上を目指した教育活動を推進する。 ・昨年度の運動能力で課題となった握力・投能力・跳能力を向上するための具体的な取組方法を確立し、継続的に取り組んでいく。
-------	--



【目標達成のための具体的な取組内容】

①学力基盤	
取組Ⅰ	<ul style="list-style-type: none"> ・習熟度別指導の充実のために、学習前段階でのレディネステストや学習力サポートテスト等の結果を分析し、個々の児童の学習の習得状況に応じた学習グループを編制する。 ・特別支援教育の観点から巡回指導教員や特別支援教室専門員等と連携を図るとともに、学習環境を改善し、学習支援を必要とする児童一人一人の個に応じた指導の充実を図る。 ・授業規律の向上のために、発達段階に応じた継続的な指導の仕方を教員間で共有し実践する。
取組Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎的・基本的な学習内容の定着を目的として、ドリルパーク等を利用し個々の児童のつまずきに応じた指導方法の改善と適切な教材の準備を行い、家庭学習や放課後・夏季休業中の補習時間を確保して計画的に実施する。
取組Ⅲ	<ul style="list-style-type: none"> ・児童が自ら学びたいと実感できる学習課題や必然性のある学び合いの場面を設定する。 ・児童が考えた経緯を自ら振り返ることができるようなノートの書き方・つくり方を、引き続き指導する。(見本となるサンプルノートの提示、児童が書いた良いノートの紹介)

②授業改善	
取組Ⅰ	<ul style="list-style-type: none"> ・教科の特性や単元の内容に応じた言語活動の充実を図る。(十分な言語活動の時間の確保) 【まとめる 書く 伝え合う (対話・討論など) 鑑賞し合う 等】 ・主運動につながる感覚づくりの運動を取り入れた授業の充実を図り、身に付けるべきよい動きを習得できるようにする。
取組Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的、対話的で深い学びにつながる学習内容を吟味し、児童が自ら必要とする小集団活動を適切に取り入れた授業を展開する。また、小集団活動の質を高め、活動を通じて自他の違いを共感的に受け入れる態度や他者意識・自己認識力・自己肯定感の向上、豊かな人間関係の育成を目指す。 ・社会科では、自分が調べたい内容と資料との関連性について話し合ったり考えたりする活動を設定する。 ・算数科では、グラフから読み取れることやそこから考えられることを話し合ったり、自分の考えの根拠を明らかにしながら説明したりする学習活動を意図的に取り入れる。 ・理科では、様々な条件や場面に応じた実験・観察を繰り返し、体験を積み重ねることによって児童が実感を伴いながら、調べたり確かめたりすることの有効性を理解できるようにする。 ・考えの中心やそれを伝える意図、順序を明らかにして表現する力を身に付けさせるための指導に取り組む。また、そのための時間を確保する。 ・児童が自らの思考の変化や学びの広がり・深まりに気付けるよう、授業終末に学習内容を振り返る活動を行う。

取組Ⅲ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 少人数指導講師や支援員・学習指導補助員・ICT支援員を交えて授業づくりができるようにする。 ・ 適切な個別指導を行ったり個性に応じて児童の能力を高めたりするために、授業で効果的にICT機器を活用したりユニバーサル化した授業づくりに取り組んだりする。
-----	---

③教員の指導力

取組Ⅰ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究授業やメンタティーチャーによる模範授業の参観、全教員による授業実践報告会など、様々な研究・研修の機会に、これまで取り組んできた授業改善の成果や指導上の課題を意見交換し、情報を提供し合うことによって、個々の課題解決と授業力の向上に役立てる。 ・ 研究奨励校としての研究実践を通して、学校行事や各教科と指導内容の関連性、教科等の横断的な指導など、教育活動の質の向上を図るカリキュラム・マネジメントの充実を図り、児童の効果的な指導に役立てる。 ・ 個々の授業力向上を目指し、授業研究を深める場として、講師を招聘しての授業実践の機会（事例研究）を積極的に導入し、指導力を推進する。
取組Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教員同士の交換授業や学年内での専門性を生かした教科担任制を一部導入し、教員間で互いに指導力を高め合う。また、複数の教員で多面的・多角的に評価し、児童の新たなよさを発見したり児童理解を深めたりして、個々の教員の授業改善につながる情報交換を行う。 ・ 理科における教員の指導力を高めるために、授業で取り組む実験や観察等の実技研修会を実施する。 ・ 学年間で教材研究できる時間を継続的に確保する。
取組Ⅲ	<ul style="list-style-type: none"> ・ ICT委員会を中心として、授業におけるICTの環境整備と効果的な活用方法を検討し、タブレット端末を活用した児童の主体的な学習を支援する。また、個別学習など学習内容の確実な理解と定着に役立てる。

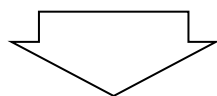
④家庭との連携

取組Ⅰ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭の理解と協力のもとに、児童の学習状況に応じた、放課後の個別指導や夏季休業中の国語・算数を中心とした補習授業を実施する。 ・ 繰り返しの学習や自主学習など家庭学習（宿題を含む）の内容を改善し、児童の学習習慣の定着に向けて家庭との連携を図る。
取組Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家庭から授業に参加したり自主学習に取り組んだりする機会を設けるよう検討していく。 ・ 基礎学力を高め、家庭での学びの習慣を身に付けさせるために、タブレット端末を活用してドリルソフト（ドリルパーク）を学習に導入する。
取組Ⅲ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個人面談や「久松すくすくプラン」を活用しながら家庭と連携し、学校と家庭が、児童に身に付けさせたい力や更に伸ばしていきたい力を明らかにし、確認した上で個別指導に役立てる。 ・ 学習指導要領の改訂に伴い、これからの授業づくりや新しい評価の仕方、通知表の見方について、再度保護者会等で説明し、理解を求める。

⑤体力向上

取組Ⅰ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 安全面に十分配慮しながら、遊びのレパトリーを増やし、多様な動きができるような機会を増やす。児童とともにコロナ禍でも取り組める遊びの紹介や創作遊びの考案を行う。また、3年生以上でロング放課後遊びを実施し、楽しみながら体を動かす機会を増やす。
-----	---

	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しみながら投げる動作を身に付けられるような用具を準備したり、校庭の固定器具などを使ったりして、休み時間にも主体的に様々な運動に取り組めるような環境を整える。また、体育の授業で継続的に持久走に取り組むことで、投げる力や筋力・持久力の向上に努める。
取組Ⅱ	<ul style="list-style-type: none"> ・児童が運動の技能を高め、運動を通じてできる喜びを実感させることを目的として、水泳サポート教室やマット・跳び箱サポート教室を実施し、技能が高まった児童を賞賛し、学年や学級で紹介する。(運動委員会による縄跳び活動の奨励と支援)
取組Ⅲ	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の体力の向上を図るために、体育学習の指導方法やマイスクールスポーツ(水泳・なわとび)の取り組み方を改善し(なわとびカードを低・中・高学年ごとに改良)、児童が意欲的・継続的に運動できる方法と環境を整える。



【取組結果の検証】

学力向上に向けた視点	取組の成果	取組の課題及び解決策
① 学力基盤	<ul style="list-style-type: none"> ・授業中や家庭学習でドリルパーク等を活用しながら指導を重ねたため、基礎的な学習内容が定着した。 ・児童が「学びたい」と実感できる学習課題を設定したことで、「勉強が好き」とアンケートで回答した児童が8割となった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習で身に付けた知識・技能を生かして課題を解決する力をさらに高めていく。そのために、自分の考えの根拠となる情報を資料の中から選択し効果的に活用したり、学んだ内容や結果などをもとに深く考察したりする場面を計画的に学習過程に位置付ける。
② 授業改善	<ul style="list-style-type: none"> ・ペアや小集団活動を通じて自他の違いを互いに共感的に受け入れるなど、他者意識や自分を認めようとする態度が育った。授業実践を通して小集団活動の質を高める上での課題を明らかにできた。 ・児童アンケートで「学習が分かる」と回答した児童が8割以上いた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の深い学びを実現するために次のような授業改善に取り組む。 ・社会科では自分が調べたい内容と資料との関連性について話し合い考える活動を設定する。算数科では自分の考えの根拠を明らかにしながら説明する活動を意図的に取り入れる。理科では実験・観察を通して確かめることの有効性を実感させる。
③ 教員の指導力	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの授業改善の成果や指導上の課題を意見交換し、情報を共有し合うことによって、個々の授業力が向上した。 ・様々な研究実践を通して、学校行事と各教科の指導内容の関連性や教科等の横断的な指導など、教育活動の質の向上を図り、児童への効果的な指導に役立てることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育活動の更なる質の向上を目指して、カリキュラム・マネジメントを推進させる。そのために学年内での教科担任制の一部導入など新たなチャレンジしたり、ICT委員会と研究推進委員会が連携して授業へのICT機器の積極的な活用方法を検討・実践したりする。

<p>④ 家庭との連携</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染症対策として、担任がタブレット端末を活用したWEB 会議システム等による指導など、学びの継続性を保障したり個別指導に役立てたりした。「分かりやすく工夫した授業をしている」と回答した保護者が9割近くであった。オンライン配信による授業を公開し、児童の学習の様子を伝えることができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭との連携を深めるために、オンラインシステム上の課題を早期に解決していくことが重要である。今後もタブレット端末を有効に活用し、家庭学習の充実を図るとともに必要に応じてオンラインによる個別指導や個別の授業を実施していく。
<p>⑤ 体力向上</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・家庭の協力のもとで水泳学習に取り組めたことは、児童の体力向上はもとより児童の主体的・継続的な運動の機会を保障することとなった。 ・今年度も新しい学校生活様式を意識した児童が多く、自ら健康であると回答した児童が9割近くあった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス感染症対策のため、体育学習やマイスクールスポーツ・休み時間の運動の制限、ロング放課後遊びの中止など、学校生活や学習環境の変化が児童の基礎体力の低下の要因につながっている。握力の低下については、改善に向けた新たな対策が必要である。